

『桜川』注釈(三)

吉田 健一・松本 麻子

キーワードⅡ 『桜川』、俳諧、風虎、磐城、北村季吟

はじめに

磐城平藩藩主内藤義概(風虎)が、松山玖也に命じて編纂させた俳諧発句集『桜川』の注釈を掲載する。本稿は前号に続いて(三)として一〇一〜一五〇句の注釈を行った。底本には大東急記念文庫本『桜川 上下巻』(加藤定彦解説、一九八五年、勉誠社)を用いた。翻刻にあたり、底本の旧漢字、異体字は現行の字体に改めた。底本で仮名書きとなっている言葉の一部を漢字に改め、統一されていない表記は歴史的仮名遣いにし、踊り字を平仮名に改め、濁点のないものは濁点を施した。これらを底本どおりに復元できるように、本文に振り仮名で示した。また、底本の難読字には括弧付きで振り仮名を付けた。同様に、歴史的仮名遣いと異なる表記についても、括弧付きで通常の歴史的仮名遣いによる表記を示した。各句には連番で番号を付した。

引用した和歌と歌番号は『新編国歌大観』、『私家集大成』による。引用した俳諧の句番号は、古典ライブラリーのデータベース「日本文学Web図書館」の中で使用されているものを付した。引用文献においても、一部平仮名を漢字に改め、踊り字を平仮名にし、濁点を補い、漢詩文には訓点を付した箇所がある。今回取り上げた句はすべて新春の句であることから、季語については特に指摘しなかった。「作者」欄の作者名及び作者略歴については、前号に掲載された者は省略し、初出の者についてのみ記し

吉田健一・松本麻子『桜川』注釈(三)

た。大東急記念文庫本『桜川 下巻』巻末の「作者索引」、角川書店『俳文学大辞典』、『誹家大系図 古風談林正風』(雲英末雄編、一九九七年、青裳堂書店、『誹家大系図』は大系図と略)、『寛文比俳諧系人名誉人』(野間光辰、『連歌俳諧研究』十七、一九五八年十二月、名誉人と略)他を参照した。また、『桜川』に入集する句数を挙げた。句集『桜川』については大東急記念文庫本『桜川 下巻』の解説を参照されたい。本稿の注釈は吉田が担当し、松本が最終的な加筆・修正を行った。

〈桜川・春一〉

101 餅花や柳はみどり花はなの春

大阪住鶴永

〔句意〕桜を思わせる餅花が付いた柳は緑色に見えます。「柳桜をこきまぜて」と歌に詠まれた花咲く春を迎えました。

〔解釈〕◇餅花 正月や小正月などに、藁や柳・竹・桑などの木の枝に餅をちぎってつけ、桜の花に見立てて飾ったもの。「餅花」と「柳」を詠む句例に、「餅花は柳を台に継木かな」(続境海草・一四二七・異翁)、「餅花の果はしだるる柳哉」(露川・一七八・露川)などがある。◇柳はみどり 柳と桜を詠んだ歌「見わたせば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりけり」(古今集・春歌上・五六・素性)に拠る表現。「柳はみどり」と表現

した句例に、「駄賃付さだめの通り雪消えて／柳はみどり人は祖父祖母(安昌)」「俳諧当世男・三四九／三五〇」、「是御僧柳は緑はなは色」(二葉集・三八七・益翁)がある。

〔作者〕大阪住鶴永(撰津・大坂) 鶴永は西鶴初号。一句。

102 茸ふわく藁わやのちはあくたに花の春

大阪住董信

〔句意〕正月、門口に敷く藁もやがて芥になつてしましますが、ひとまず花の春を迎えました。

〔解釈〕◇茸く藁や 正月に門口に敷く新しい藁。新年の季語。「茸く」は「福」を掛ける。「吹く藁」の句例に「吹く藁や塵にまじわる神の春」(延宝元年(一六七三)歳旦発句集・一六〇四・正輝)がある。◇あくた 腐ったり汚くなったりなどして打ち捨てられているもの。「あくた」を詠んだ歌例に「散りぬればのちはあくたになる花を思ひ知らずもまどふ蝶かな」(古今集・物名・四三五・遍照)があり、本句はこの和歌を本歌とした。なお、句例に、「散りぬれどあくたにならぬ花火哉」(境海草・五七五・云捨)、「女郎花負ひ行く風やあくた川」(江戸広小路・二七三・柴女)などがある。

〔作者〕大阪住董信(撰津・大坂) 一六句。

野州宇都宮にて

103 住めば是もつつのみやこそ花の春

鈴木重徳

〔句意〕住んでみると、この宇都宮こそ本当の都のように思われてきて、ここで花の春を迎えています。

〔解釈〕◇住めば是も 住んでみるとこの場所も、の意。歌例に「君住めばこも雲井の月なれどなほ恋しきは都なりけり」(千載集・異本歌・一二九〇・左馬頭行盛)があり近い。◇つつのみやこそ 現実の都である、

の意の「うつの都」と「宇都宮」を掛ける。「うつの…」は、「都にもいまや衣を宇津の山夕しも払ふ鶯の下道」(新古今集・羈旅歌・九八二・定家)の歌例のように、『伊勢物語』の「駿河なる宇津の山べのうつつにも夢にも人にあはぬなりけり」を踏まえ「宇津山」とするのが一般。ただし、本句は詞書にあるように「宇都宮」とした点が眼目なのであろう。

〔作者〕鈴木重徳(国不知) 一句。

104 試筆にもちらし書せし花の春

桜井玄玖

〔句意〕書初めの際に、桜の花が散るさまを思わせる優雅なちらし書きをした花の春です。

〔解釈〕◇試筆 「始筆」とも。書初めのこと。新年の季語。句例に「童部らしき長歌反歌も試筆かな」(承応三年(一六五四)歳旦発句集・六四四・季吟)がある。◇ちらし書 懐紙や短冊などに和歌や手紙などを行の頭を揃えずに散らして書くこと。「ちらし」は花の縁語。句例に「返事には主ある花のちらし書」(続山井・六一八・季吟)、「風の手もいろはの後やちらし書」(毛吹草・一八九五・正次)などがある。

〔作者〕桜井玄玖(下野・宇都宮) 一〇句。

105 堯と舜と禹まごかぬ御代や三みの春

観世吟葉子

〔句意〕中国古代の聖王として知られる堯・舜・禹のように、治世に揺らぎのない御代の中で初春、仲春、晩春と続く季節を迎えました。

〔解釈〕◇堯と舜と禹ごかぬ 堯・舜・禹は伝説上の中国古代の聖王。句例に「堯舜の御代にもこゆる今年かな」(続山井・一一六八・貞徳)がある。「禹ごかぬ」は「動かぬ」を掛ける。「動かぬ」と「御代」を結んだ句例に「東風に動かぬ松や御代の春」(貞徳誹諧記・五〇四・加友)がある。◇三の春 「三春」は初春、仲春、晩春の総称。春の三箇月のこと。

春の季語。「三の春」は「三春」に同じ。読み方は、ここでは「満つ」と掛けて「みつのはる」と読む。「三の春」の例として「三の春は清きよきぞ門の松」（貞徳誹諧記・五一三・蝶々子）、「ついたちの一ふりや雪三の春」（同・五二六・利貞）などがある。

〔作者〕 観世吟葉子（山城・京） 四句。

106 万機あり一日二日みつの春

小田部福胤

〔句意〕 新年早々、いろいろな出来事があり、あわただしく一日、二日、三日と過ごしているうちに、春がすっかり到来しました。

〔解釈〕 ◇万機 一日の中で起きる様々な出来事。転じて、重要な政務。『和漢朗詠集』の「我が后一日の沢、万機の余り、曲水遙かなりと雖も」（三九・菅原道真）の「万機の余り」は「我が君の」政務の合間に」というほどの意味である。この句を踏まえたか。本句の「万機」は本来の「様々な出来事」という意味であろう。「万機」を用いた句例は見出せない。◇一日二日 この言い回しを用いた句例に「養子婿一日二日のもの思ひ」（陸奥衛・一四八・氷花）がある。また、「元日二日」を用いた句例に、時代は下るが、「元日二日京のすみずみ霞みけり」（蕪村発句〈落日庵〉・一四九一）などがある。◇みつの春 「みつ」は「初春、仲春、晩春の三つの春が」満つ」の意を掛ける。105参照。

〔作者〕 古田部福胤（陸奥・岩城） 十二句。

107 お流れや二つ瓶子に三つの春

斎藤親盛

〔句意〕 新年を祝う宴でお流れを頂戴しました。二つの瓶子が酒で満たされていただけでなく、初春、仲春、晩春の三つの春が満ちています。

〔解釈〕 ◇お流れ 酒席で目上の人からいただく酒。句例に「お流れや千代を八重さく菊の水」（玉海集・二〇五三・貞室）がある。◇瓶子 酒を

入れて注ぐための口の狭い瓶。句例に「桃の酒つぎしも三日へいじかな」（山の井戸・六八四）などがある。◇三つの春 「みつ」は「三つの春が」満つ」と（瓶子に酒が）満つ」を掛ける。105参照。

〔作者〕 斎藤親盛（陸奥・二本松） 四十句。

寛文八年申正月下旬

108 何事もかなへのあしや三つの春

竹下守正

〔句意〕 鼎の三本の足のように揺るぎのない治世の下、何事もすべて叶う初春、仲春、晩春の三つの春を迎えました。

〔解釈〕 ◇寛文八年 一六六八年。戊申。◇何事も この語を用いた句に「何事も折れば庚申の夜に」（犬子集・二五六四・一正）の例がある。◇かなへ 鼎。食物を煮るのに用いる三足の容器。『犬子集』の例と同様、「叶へ」を掛ける。他にも、「手水にも塩馴衣袖ぬれて／神に祈りのかなへ是非共（友知）」（時勢粧・三三三四／三三三五）などの例がある。鼎の足は三本であることから、「三つの春」は縁語でもある。

〔作者〕 竹下守正（出羽・山形） 三句。

109 からからぬ世やなめてしる三つの春

門村兼豊

〔句意〕 おしなべて、それほどつらくもないこの世なのでしょいか、嘗めてみて初めて知りました。蜜のように甘い味のする初春、仲春、晩春の三つの春がやってきたことを。

〔解釈〕 ◇からからぬ 「からし」は「からき世をうつせみなくや山椒の木」（塵塚誹諧集・二一六・徳元）に見られるように、生きてゆくのがつらい、の意。「からからぬ」はその逆で、仁政が行き届き、生きてゆくのがつらくもない、という意。◇なめて 「嘗めて」と「総じて」「おしなべて」の意の「なめ（べ）て」を掛ける。「嘗めて」と詠む句例に「嘗め

て見よ名もあぢさひの花の露」(犬子集・六六四・為松)がある。◇三つの春 「みつ」は「三つ」と「蜜」を掛ける。105参照。

【作者】門村兼豊(武蔵・江戸) ト養門。江戸久保町に住む。晩年は京に住んだ。一六句。

110 三つの春是ぞなにはの事始

江戸住汎乎

【句意】初春、仲春、晩春と続く春を迎えました。これぞまさしく名高い難波の事始めです。

【解釈】◇是ぞ 語調を強める意。句例に「丸く赤し是ぞつい朱の盆の月」(崑山集・四六五二・長頭丸)、「もて来つる是ぞ年玉心玉」(寛永八年(一六四一)歳旦発句集・三九五・宗房、毛吹草・四五六・同)などがある。◇なには 「難波」は現在の大阪市、歌枕。「名には」を掛け、名高い意も含めるか。「心あらむ人に見せばや津の国の難波わたりの春の景色を」(後拾遺集・春・四三・能因)の歌のように、春の景とともに詠まれることが多い。句例にも「難波津の春や見物おほからん」(犬子集・三〇五七)、「是はさて難波の浦谷春の夢」(俳諧当世男・一一〇・蝶々子)などがある。世阿弥作の「難波」に「難波の事に至るまで。豊かなる代の例こそ。げに道広き治めなれ」とあり、これを意識した句か。◇事始

新年に、一年の幸いを祈りながら最初に諸事を行なうこと。正月の二日以後、幕府にて諸事をはじめて行なう儀もいう。句例に「初春のなごめづらしき事始」(万治二年(一六五九)・歳旦発句集・七七四・重供)がある。「難波」と結んだ句例に時代は下るが「難波女に何からとはん事始」(園女・三三二)がある。

【作者】江戸住汎乎(武蔵・江戸) 一句。

111 天もあけつ国とこ立し年始

寛文十一年亥四月中旬

【句意】天の戸が開き、夜も明けて新春を迎えました。神代のころ国のはじまりに常立尊があらわれましたが、その名のようにいつまでも続く年の始めです。

中畑時永

【解釈】◇寛文十一年 一六七一年。辛亥。◇天もあけつ 「天」は空の意。「天の戸」を開け、夜が明けたと詠む歌例は「天の戸をおしあけたの雲間より神代の付きの影ぞ残れる」(新古今集・雑上・一五四七・藤原良経)のように多い。本句も、戸が開いて夜が明けた、新春を迎えたの意と解せるか。ただし、「天もあけつ」とした歌例・句例は見出せない。

◇国とこ立し 『古事記』によれば、天地開闢の際に「国之常立神」が現れたとされる。常に存在する、いつまでも続く、の意味か。歌例には、「天慶六年同竟宴歌、国常立尊」の詞書で、「天の下をさむるはじめ結びおきてよるづ世までにたえぬなりけり」(新勅撰集・神祇・五四一・大江維時)がある。句例に「今朝しるや国常立の御代の春」(寛永一七年(一六四〇)歳旦発句集・三六一・立圃)がある。

【作者】中畑可望子 時永(陸奥・須賀川) 二句。

112 天運や循寛文の年始

宮内友也

【句意】世の移り変わりにより時はめぐり、寛文という年の始めを迎えました。

【解釈】◇天運循寛 「天運」は、世のめぐり合わせ、世の移り変わり。『大学』に「天運循環、往きて復らざるなし」(章句序)とあり、これを踏まえたもの。歌例、句例ともに見いだせないが、山岡元隣『宝蔵』の「分廻」の項に付けられた狂詩の結句に「天運循環大分回」とある。◇循寛文 「循環」と「寛文」を合わせた言い方。「寛文」を用いた句の例に「寛文や七年よるし今日の春」(寛文七年(一六六七)歳旦発句集・一一六七・空存)、「寛文や八百万代の神の春」(寛文八年(一六六

八) 同・一二〇七・友貞) などがある。

〔作者〕 宮内友也 (撰津・大坂) 四三句。

寛文七年に

寛文七年未正月上旬

113 寛文や七つのごとし読始

橋本富長

〔句意〕 寛文も七年を迎えた今年の正月、七歳になった子が読始を行いました。

〔解釈〕 ◇寛文七年 一六六七年。丁未。◇読始 書物などを読み始めること。句例に「程もなくはたち一とせつい立ちて／葵の巻をよみはじめけり」(正章千句・九二五／九一六・正章)がある。また、新年にはじめて書物を読むことを、「読初」とも言う。句例に「読初や源氏の奥義三ケ日」(万治元年(一六五八)歳旦発句集・一六五八・由雪)、「読初や聖の代とてきりん経」がある。

〔備考〕 時勢粧・一〇二〇に同じ作者の同一句が見える。

〔作者〕 橋本富長 (山城・京) 京の人。後、江戸に移る。二二一句。

万句巻頭

寛文六年七月中旬

114 御代は万句まづ巻頭のごとし哉

北村季吟

〔句意〕 あなたさまの治世に、長く続く万句の巻頭の句のような、今年も最初の日がやってきました。

〔解釈〕 ◇寛文六年 一六六六年。丙午。◇御代 為政者の治世を言祝ぐ表現。ただし、次に示したように、弟子の元隣が総称として独立し、俳諧の世界で活躍する世を含蓄するか。◇万句 連歌・俳諧の形式。治世が長く続くさまを意味するか。『宝蔵』に季吟作として「元隣万句興行に」と

題する同一句が見えることから、本句はその折に作られたものと思われる。このほか、「元隣万句」に関する句として、「元隣万句に」という詞書のある「百けいはやる九重の春／酒盛は花有 所々にて」(続山井・一六／一一七・湖春)、「元隣千句の後万句催しければ」という詞書のある「月弓も後ばりなれや三ヶの空」(続山井・四一九四・元恕)がある。

〔備考〕 宝蔵・一四七に同じ作者の同一句が見える。

〔作者〕 北村季吟 (山城・京) 一三九句。

寛文十一年亥正月上旬

115 明けて我年とり物やこの一句

北村湖春

〔句意〕 年が明けたならば、自分の正月用の品といたしましょう。この一句を。

〔解釈〕 ◇寛文十一年 一六七一年。辛亥。◇明けて 年が明けて。句例に「明けて今朝耳よりとしぞ若夷」(寛文十一年(一六七二)歳旦発句集・一四一九・来安)がある。◇年とり物 年の暮に用意する正月の飾物や必要品のこと。『虎明本狂言』の「米市」に、「それに付て思ひ出た。いつも年とり物をやるものをいかなんだか」とある。時代は下るが、「日の春をさすがに鶴の歩みかな(其角)」を立句として、芭蕉らが貞享三年新春に興行した百韻「初懐紙」と前半五十韻に評注を加えたものに、「つれなきひじり野に笈を解く(枳風)／人あまた年とり物をかつき行く(楊水)／この句、又秀逸なり。聖の宿かりかねたる夜を、大晦日の夜に思ひつく也。まづ珍重。聖は野に臥し怪びたるに、世にある人は年とり物をかつきはこぶ体、近頃骨折り也」(四八／四九)とある。

〔備考〕 寛文十一年(一六七二)歳旦発句集・一四一〇に同じ作者の同一句が見える。

〔作者〕 北村湖春 (山城・京) 五三句。

寛文八年申正月下旬

116 今朝や年立の三点横がすみ

武野保俊

〔句意〕今朝から新年が始まりました。辰の刻の三点ごろ、横がすみがかかっています。

〔解釈〕◇寛文八年 一六六八年。戊申。◇今朝 ここでは元日の朝。句例に「今朝や春あつさりさつと一かすみ」（慶安二年（一六四九）歳旦発句集・五二二・季吟）、「今朝や春たつ年波の帰り花（寛文四年（一六六四）同・九七〇・常辰）がある。◇年立 新しい年が始まること。「立」は「辰」を掛ける。◇三点 更点法による時刻の数え方。◇横がすみ 横に棚引いた霞。歌例に「三輪の山ふもとめぐりの横がすみしるしの杉ぞうれなかくしそ」（夫木抄・五二七・源伸正）、句例に「山と山の頭や頸引の横がすみ」（崑山集・五五八・保友）がある。

〔作者〕武野保俊（撰津・大坂） 五一句。

117 蓋も我が身につもる年始かな

高滝以仙

〔句意〕杯を交わしながら、自分の身に積もってゆく歳月の重みを感じる年の始めです。

〔解釈〕◇蓋 句例は「杯もいたたく霜や翁草」（時勢粧・四一八・水野林元）、「杯も詩作もうかぶ流れかな」（毛吹草・一〇六九・安清）など多数ある。◇我が身につもる 重ねた蓋が我が身に降り積もる意。類似した言い回しの歌例に「大方に過ぐる月日を眺めしは我が身に年の積もるなりけり」（新古今集・雑歌上・一五八七・慈寛）が、句例に「年徳や我身につもる老の春」（年代不知歳旦発句集・三三二・泰重）がある。

〔作者〕高滝以仙（撰津・大坂） 旧姓山崎。堺に生まれ、後に大坂に住む。初め令徳門、後、宗因門。八一句。

寛文十一年亥正月下旬

118 世は静舞ひ出る日のはじめ哉

梶山宗吾

〔句意〕世の中は静かで、そこに静御前が舞い出るように今年最初の日が昇りました。

〔解釈〕◇寛文十一年 一六七一年。辛亥。◇静 世が静かなさまと、「舞ひ出る」と続くことから、源義経の妾であった静御前を掛ける。静御前を詠む句例に「花に舞ふ胡蝶は芳野静かな」（崑山集・一八〇〇・長頭丸）がある。◇舞ひ出る 朝日が舞い出る、と詠んだ句例に「舞出る朝日や野辺の露はらひ」（ゆめみ草・一六四九・好道）がある。◇日のはじめ 一年の始めのこと。句例に「日の始祝へ十二の鏡餅」（寛文四年（一六六四）歳旦発句集・一〇〇一・正倫）がある。

〔作者〕梶山宗吾（撰津・大坂）貞徳門。保友と号す。一八句。

119 千々の祝儀ひとつの春の始かな

石田未琢

〔句意〕さまざまな祝いの品々もこの一つの春の到来には敵いませんので、めでたい年の始まりです。

〔解釈〕◇千々の さまざまな、の意。歌例に「千々の色に移るふらめど知らなくに心し秋の紅葉ならねば」（古今集・恋四・七二六・よみ人しらず）、句例に「両方に立つ門松や千々の春」（崑山集・一六二・直昌）などがある。◇祝儀 祝いの場で贈られる金品。句例に「いつ迄も粽の祝儀久しかれ」（貞徳誹諧記・三九三・重頼）などがある。◇ひとつの春 一つしかない春、の意。「千々の」の対。歌例に、『伊勢物語』第九十四段の、女のもとに通わなくなつてしまった男が未練がましく女に送つた

「秋の夜は春日忘るるものなれやすみにきりや千重まさるらむ」という歌に対する女の返歌「千々の秋ひとつの春にむかはめや紅葉も花もともにこそ散れ」があり、これを本歌とした句。また、この『伊勢物語』の歌を

本歌として新春の句を詠んだ例に、「むかはめやひとつの春に若戎」(時勢粧・一三七・志賀俊安)がある。

〔作者〕石田未琢(武蔵・江戸) 一五句。

寛文九年丙六月中旬

120 来る春や道をたがへぬ君子国

伊藤永倫

〔句意〕春がやって来しました。道を違えることのない君子が治めている国に。

〔解釈〕◇寛文九年 一六六九年。己酉。◇来る春 春が来ること、新春。句例に「道しりて来る春や老の午の歳」(崑山集・四四・不白居士)

がある。◇道をたがへぬ 人の道を誤らない、の意。「道」の句例に「さほ姫もしたがふ道や三ヶ日」(寛文八年(一六六八)歳旦発句集・一二二七・流味)が、「たがへぬ」の句例に「元日の例をたがへぬ家の中」(俳諧塵塚・一七九・立圃)がある。◇君子国 君子すなわち立派な人物が治めている国。句例に「門松のあらはず徳や君子国」(寛文五年(一六六五)歳旦発句集・一〇一三・似空)、「行く先にさちある春や君子国」(寛文二年(一六七二)同・一四九二・国信)などがある。

〔作者〕伊藤永倫(伊勢・山田) 六句。

121 来る春やどこからどこも一日路

土岐近之

〔句意〕新春はここからここまで、一日で来ることができるとあたりまでやって来しました。

〔解釈〕◇どこからどこも ここからここまで、の意。歌例には見られない表現。句例に「馬つぎはどこからどこと定まりて」(正章千句・九四五・正章)がある。◇一日路 一日で着く行程のこと。これも俳諧の例にのみ見られる。句例に「大名の跡にさがつて一日路」(宗因七百韻・二一

四)がある。

〔作者〕土岐近之(尾張・名古屋) 二十七句。

122 立春の人の姿や真の文字

木村好与

〔句意〕春を迎えた日の人の姿は、書き初めとして書く真名の文字に顕れることです。

〔解釈〕◇人の姿 人身。歌例に「受けがたき人の姿に浮かび出でて懲りずやたれもまた沈むべき」(新古今集・雑歌下・一七五一・西行)が、句例に時代はやや下るが「物おもふ人の姿や朧月」(陸奥衛・三二九・不願)がある。◇真の文字 真名すなわち漢字のこと。「書初に詩や真名鶴の千代の春」(承応二年(一六五三)歳旦発句集・六二四・貞成)の句例のように、正月に行う書き初めの漢字を言うか。「文字」と「立春」を用いた句に「立春や歳日の下に一文字」(万治三年(一六六〇)歳旦発句集・八〇九・常辰)がある。

〔備考〕寛文十一年(一六七二)歳旦発句集・一三六二に同じ作者の同一句が見える。

〔作者〕木村好与(山城・京) 立圃門。一句。

寛文七暦元日子日二月壬有ければ

123 立春はけふ百廿日鼠かな

京住祖白

〔句意〕立春の今日、子が生まれて百二十日目を迎え、お食い初めの祝いをしました。子を孕みやすい鼠のように、次々と子宝に恵まれたいものです。

〔解釈〕◇寛文七年 一六六七年。丁未。この年の元日は丙子。二月は七日(壬子)、十七日(壬戌)、二十七日(壬申)が壬の日。また、この年の立春は一月一五日。◇百廿日 『類船集』「五器」の項に「生れ子の百

廿日めはくひぞめとて五器をもとむる事也。正月には先うるしくさきにすはりていはふ事也」とある。◇廿日鼠 ハツカネズミのこと。句例に、「細き月の今宵は廿日鼠哉」（玉海集・一八八五・重光）、「廿日鼠見えし君かも猫の妻」（江戸広小路・一一九・破衾子）がある。

〔作者〕京住祖白（山城・京）一句。

江戸鉄砲洲筑地の新宅にて

124 立春の家もにゐはりつき地かな

半井慶友

〔句意〕立春を新治筑波ではないが、築地に建てた新しい家で迎えました。詞書にあるように、本句では「築地」に家を新築したことを指す。また、常陸国の地名「新治」を掛ける。『日本書紀』等に、日本武尊が詠んだとされる「新治筑波を過ぎて幾夜か寝つる」を踏まえた表現。この句は、後に連歌の嚆矢とされた。俳諧の句例に「酒折のにゐはりの菊とうたはばや」（笈日記・八五二・素堂）がある。◇つき地 現在の東京都の地名、築地。また、家の土台造りのために、土地を突き固める意味を込める。句例に「目ざましにみる夕暮の江戸鑑／つき地つき地にさざれ石垣」（西鶴俳諧大句敷・一四三／一四四）がある。

〔作者〕半井慶友（武蔵・江戸）三句。

寛文八年申正月中旬

125 春たつや去年はいにしへ今の京

高瀬梅盛

〔句意〕元方の歌のように、正月前に立春を迎え、去年は昔の事になってしまいました。そして、今、京の都に春が訪れました。

〔解釈〕◇寛文八年 一六六八年。戊申。なお、寛文八年の立春は、同七

年二月二六日。◇春たつや去年… 年内立春を詠んだ『古今集』巻頭歌の「年のうちに春は来にけりひととせを去年とやいはむ今年とやいはむ」（春上・一・在原元方）に拠る。◇去年はいにしへ 年内立春があると、元方の歌のように、それまでの一年を去年と呼んだらよいか、今年と呼んだったらよいか迷うくらいだから、まして去年のことははるか過去のことと思えてくる、という意。◇今の京 句例に「替らぬやいにしへよりも今の京」（時勢粧・五一五六・）、「今の京も難波の例か芦粽」（続境海草・一七四・保友）などがある。

〔備考〕寛文八年（一六六八）歳旦発句集に同じ作者の同一句が見える。

〔作者〕高瀬梅盛（山城・京）貞徳門。『便船集』『類船集』の編纂者。七句。

126 六十余周の春たつ天下かな

石倉一入子

〔句意〕六十余州の国全体に、周の最盛期のごとき春がやってきました。〔解釈〕◇六十余 律令制の下では日本全体が六十余国に分けられていた。歌川広重の『六十余州名所図会』に見られるように、江戸時代においても日本は六十余国（州）に分かれると認識されていた。句例に「国々や六十余花のもてはやし」（時勢粧・一一七八・水野林元）がある。なお、「六十余」を「むそぢあまり」と読む句に「六十年余り一つ子ならし今日の春（明暦三年（一六五七）歳旦発句集・七一九・成次）がある。本句も「むそぢあまり」と読むか。◇周 中国古代の王朝。その前半は礼の行われた理想的な時代と認識された。句例に「周の代のことの薬草のもちい哉」（続山井・一五〇〇・重信）。なお、「周」は「州」及び「周り（ぐる）つとひとまわり）」を掛ける。◇天下 支配者によって統治される国全体。句例に「天下皆ひらくや年の花の春」（崑山集・三四〇・長頭丸、年代不知歳旦発句集・一〇二・同）、「治るや天下一人の君が春」（年代不知歳旦発句集・一〇二・為親）がある。

〔作者〕石倉容膝亭一入子（紀伊・長島） 一四句。

127 重々とおなをりぞひや年男

浅香研思

〔句意〕どっしりと上座に移る年男であることです。

〔解釈〕◇重々と 重々しく、どっしりと、の意。句例に時代は下るが、
「名月の夜や重々と茶臼山」（芭蕉発句・九七六・桃青）がある。◇おな
をりぞひ 「おなをり」は、宴席などで下座から上座に移る意の「直
る」の名詞形の丁寧表現。歌例・句例は見出せない。◇年男 その年の干
支に当たる男。句例は「袴着てたつや五つの年男」（年代不知歳旦発句集
・二七四・重栄）、「たのしむや友延宝の年男」（延宝二年（一六七四）歳
旦発句集・一七六一・直之）など多数ある。

〔作者〕浅香研思（陸奥・岩城） 一二〇句。

128 春の色や青砥左衛門とし男

小沢衆下

〔句意〕春の色は青、その青にちなむ青砥左衛門を思わせる誠実な年男で
あることです。

〔解釈〕◇春の色 五行説では青。句例に「春の色は青侍か弓はじめ」
（年代不知歳旦発句集・六七・友貞）、「来る春の色も青きや丑の年」（延
宝元年（一六七三）歳旦発句集・一五五七・了味）がある。◇青砥左衛門
鎌倉中期の伝説的な武士青砥左衛門尉藤綱。鎌倉滑川に十文を落とし、
五十文の費用を使ってこれを探させたという逸話を残す。句例に「煤箒や
青砥が一銭やとひ人（洛陽集・一一二三・竹子）、「火燧から青砥が銭を
拾ひけり」（其角・九〇〇）がある。◇とし男 129 参照。

〔作者〕小沢衆下（陸奥・二本松） 一一八句。

129 余人にはまされりけりな年男

京住可成

〔句意〕正月用の注連縄を作りました。粗末な藁で作ったものですが、年

須田東竹

〔句意〕世間一般の男たちよりずっと勝っています。今年の年男は。
〔解釈〕◇余人には… 『伊勢物語』第二段の「奈良の京ははなれ、こ
の京は人の家まだ定まらざりける時に、西の京に女ありけり。その女、
世人にはまされりけり。その人、かたちよりは心なむまさりたりける」を
踏まえた。句例に「獄門の名々字は世にかくれなし／数百余人の夜討強
盗」（信徳十百韻・七六七／七六八）がある。◇まされりけりな この表
現の歌例、句例は見出せないが、「まされり」を用いた歌に「君こふと涙
にぬるる我袖と秋の紅葉といづれまされり」（後撰集・秋下・四二七・源
整）などがある。

〔作者〕須田東竹（武蔵・江戸） 六一句。

130 上下や着つつ馴れにし年男

伴人似

〔句意〕唐衣ではないけれど、袴をずっと着ているうちに着馴れてきた、
年男であることです。

〔解釈〕◇上下 この句では「袴」のこと。句例に「親と子の上下を今拵
て」（大子集・二一三八・貞徳）、「上下も皴やより行く年男」（江戸通り
町・二五八・一耳子）がある。◇着つつ馴れにし 『伊勢物語』第九段に
ある「から衣きつつなれにしましあればはるるきぬるたびをしぞ思
ふ」を本歌とした表現。句例に「男ありけりきつつ馴れにし土用干」（阿蘭
陀丸二・六九・良和）、「白帷子着つつ馴れにし天河」（洛陽集・六八五・
一知）がある。

〔作者〕伴人似（陸奥・二本松） 五句。

131 注連縄や藁でつくつても年男

男は立派に見えます。

〔解釈〕◇注連縄 正月に玄関に張る藁で作った飾り。句例に「しめ縄は去年と今年の境目哉」(犬子集・二五・常勝、崑山集・一九)、「しめ縄や春をもくくる戌の年」(犬子集・四四)がある。◇藁でつくつても 天明七年(一七八七)成立のことわざ集『譬喩尽』に「藁で作つても町の東ねじや」(藁で作つた注連縄でも町内をまとめるシンボルだ)が見える。粗末な藁で作つても、の意か。句例に、時代は下るが、「おのこなるかかしや藁でたばねても」(俳諧新選・一四六二・貝錦)がある。

〔作者〕京住可成(山城・京) 一句。

132 老にきと人に語るな年男

風月不見

〔句意〕年男なので、年を取つただなんて人に言わないでください。

〔解釈〕◇老にきと人に語るな 似た表現を含む歌の例に「名にめでて折れるばかりぞ女郎花我おちにきと人に語るな」(古今集・秋上・二二六・遍照)がある。この歌を典拠としている句に「馬よりもわれ落にきと笑はれて」(俳諧塵塚・四二一・季吟)、「落にきと人に語るな精進日」(境海草・七四三・方由)、「落にきと人に語るなぼり橋」(同・七四五・信勝)などがある。

〔備考〕時勢粧・一二人に同じ作者の同一句が見える。

〔作者〕風月不見(山城・京) 二句。

元日子日なりければ

133 元日や子よりはじめて十二月

京住一治

〔句意〕今日は元日で、十二支の最初の子の日です。その子から始めて十二か月の一年が始まることです。

〔解釈〕◇子の日 寛文十二年(一六七二)の元日は子の日。子の日を詠んだ句に「十二時今朝くる春や初子の日」(年代不知歳旦発句集・二五九・円立)、「元日は子一つよりや三の春」(時勢粧・五二六・伴只計)、「巳年元日子日なれば/年と日もみねに立つたる霞哉(如貞)」(続山井・一二七五)がある。◇十二月 句例に「算用もするやさんしの十二月」(崑山集・七五五二・貞室)、「酉の年の尾ばねの数か十二月」(続山井・五二五二・因元)がある。

〔作者〕松屋一治(山城・京) 一句。

寛文十二子のとしなりければ

134 子もことし生むや寛文十二疋

京住長知

〔句意〕今年の子年。子年のねずみにあやかって、寛文十二年も子宝に恵まれ、生活も豊かになる年となるでしょう。

〔解釈〕◇寛文十二年 一六七二年。壬子。元日も子の日。◇子 「子年」を詠む句例に「子の日には足をやすむる今年哉」(犬子集・一一五・偷閑)、「子の年や夜の間にくるもかくれ里」(万治三年(一六六〇)歳旦発句集・八二一・昌房)がある。◇生むや 句例に「月もみちて生むや珊瑚の天の原」(塵塚俳諧集・一〇〇・)「佐保姫を年子に生むか天原」(鷹筑波・一一九四・一正)がある。◇疋 ねずみの数を数える「疋」と銭貨の数を掛ける。生活も豊かになる意を込めるか。

〔作者〕京住長知(山城・京) 一句。

子のとし

135 目出たさやわらふて年のねねこさい

松山住不二子

〔句意〕めでたい正月がやってきました。笑いながら「藁筆」ではないが、わらしべよ安心してお眠りなさい。

〔**解釈**〕◇目出たさ 句例に「草木も目出たさう也けふの春」（犬子集・一九・良春）、「めでたさはいづくも同じ宿の春」（延宝二年（一六七四）歳旦発句集・一六五七・和年）がある。◇わらふて 「笑ふ」と「藁筆」の意か。年始を笑って迎えるさまを詠む句に「袴着ながら笑ふ歳旦」（大坂辰歳旦惣寄・一一二・登親）がある。また、時代は下るが、「笑ふ」と「藁」を掛けて用いた句例に「壁の麦葎千年をわらふとかや」（田舎の句合・一七）がある。◇ねねこさい 「ねねこ」は眠ること。ねねこ、とも。幼児語。句例に「ねねこせよとゆぶる炬燵の灰げ哉」（崑山集・七三一八・元晴）、「火桶をも抱いてねんねんねねこ哉」（続山井・五六二二・風鈴軒）などがある。

〔**作者**〕松山住不一子（伊予・松山） 一句。

壬子の年

136 口すすぐ若みづのえのね起かな

石河姜口

〔**句意**〕口を若水で漱ぎました。今年のみずのえの子の年で、元日も子の日。そのめでたい朝に寝起きたことです。

〔**解釈**〕◇壬子の年 寛文二二年（一六七二）か。この年は元日も子の日だった。◇口すすぐ 口に水を含んで洗い清めること。句例に「漱ぐ流に石の踏どころ」（平安二十歌仙・六九一・太祇）がある。◇若みづのえ 「若みづ」は「若水」と「壬」を掛ける。若水は元日に初めて汲む水のこと、これで口を漱ぎ茶をたてる。句例に「汲みあぐる若水のえの柄杓かな」（犬子集・五六・愚道、年代不知歳旦発句集・一九五・同）がある。また、「若水」と「癸」を掛けた句、「汲み揚ぐる若水のとの井筒哉」（崑山集・一五三・毎延子）などもあり、この時期の俳諧に用いられた言い回しである。◇ね起 子の日の朝に起きること。「子起き」（子の日に起きること）の「子」、及び「寝起き」の「寝」を掛ける。この年は「みづのえのね」の年で、元日も子の日であったので、「みづのえのね

起」と言う表現を用いたところがこの句の眼目。「寝起」の句例に「寝起かや風に目をするふし柳」（崑山集・一〇九二・重勝）がある。

〔**作者**〕石河姜口（国不知） 一句。

137 口詩をつくれ 駒の長も丑の年

松賀紫塵

〔**句意**〕源氏物語にあるように、口詩を作って駒の長にあげてください。今年、駒の長も「午」ではなく、「丑」年を迎えたことです。

〔**解釈**〕◇口詩 物に書かないで、口で詠ずる詩のこと。『類船集』の「馬屋」の項に「皇子誕生 猿」などと並んで「口詩」とある。これは『源氏物語』「須磨」の「駒の長に口詩取らす人もありけるを」による。句例に『正章千句』の「無沙汰にはせざる駒のおさおさし／口詩とらせしはさぞな満足」（九二五／九二六）があるが、貞徳の批言に「あまり付過候。口詩と斗有度候」とあるのは、『源氏物語』「須磨」に依拠しすぎた言い方であるの意であろう。◇駒 馬屋、厩とも。馬小屋。馬を飼っておく小屋。句例に「いななける駒の口にまぐさなし」（新增犬筑波・六二〇・長頭丸）がある。これも、『源氏物語』の該当部分を連想させる句である。◇丑の年 「駒」を「午」と見て、「午」ではなく「丑の年」とした言葉遊び。「丑の年」と詠む句例に「今朝くるや大日本へ丑の年」（崑山集・二七五・貞長）がある。

〔**作者**〕松賀紫塵（陸奥・岩城）磐城平藩家老松賀概純（族之助）のこと。藩主内藤義概（風虎）を取り巻く俳壇で重きをなしたが、延宝八年（二六八〇）に始まった「小姓騒動」と呼ばれるお家騒動の中で悪役とされ、失脚した。 一八一句。

138 何候そつの国かいの丑の年

西山梅翁

〔**句意**〕何でございましょうか。津の国で飼っている、角のような法螺貝

を牛の貝と言いますが、今年、丑の年を迎えました。

【**解釈**】◇**何候ぞ** 何でございましょうか、どういふことでしょうか、の意。句例に「何候ぞ草に黄色の花の春」(風雪・四一一)がある。◇**つ**

国 撰津の国。句例に「津の国のさぞさぞにほひ渡るらん」(守武千句・五五三)、「いく田もやあらす小鹿のつの国路」(崑山集・五三三一・長

昌)がある。「つ」は「角」を掛ける。◇**か**の**丑** 「牛の貝」の意

か。丑の刻を知らせるための法螺貝の音をいう。歌例に「などやかく牛の

貝吹く時生まれ月はむまにも影のなるらん」(為忠家後度百首・三一一)がある。「かい」は「飼ひ」を掛けるか。◇**丑**の**年** 139参照。句例に「長

閑さや角ぶりもせぬ丑の年」(毛吹草・四一一・祖翁)がある。

【**備考**】延宝元年(一六七三)歳旦発句集・一六〇六に同じ作者の同一句が見える。

【**作者**】西山梅翁(撰津・大坂) 西山宗因のこと。連歌師・俳諧師。談

林派の総帥。内藤風虎の招きに応じて磐城平を訪れたこともある。俳諧撰

138 春立つや勝手屏風の寅とらの年

大阪住季延

【**句意**】新春を迎えました。勝手口に立てた屏風に虎が描かれています

が、今年はその寅の年です。

【**解釈**】◇**春立つ** 新春を迎えること。「立」は「屏風が立つ」の「立

つ」を掛ける。句例に「春立つやにほんめでたき門の松」(犬子集・1・

徳元、塵塚俳諧集七九三、年代不知歳旦発句集・五、などに同一作者の同

句あり)がある。◇**勝手屏風** 台所に立てる粗末な屏風のこと。用例

として、『鴉鷺俳諧』には「座敷には田子の浦半の絵を出て(立甫)／勝

手屏風のふりはしほらし(満直)」が引かれている。その他の句例に「ぐ

わらりつと屏風をとれば勝手口」(国の花・一四六四・木隣)がある。◇

寅の年 句例に「霞さへまだらにたつや寅の年」(犬子集・四八・貞徳、

崑山集・三五七、年代不知歳旦発句集・八六にも同一作者の同一句あり)がある。

【**作者**】大阪住季延 一句。

140 春や今朝たち尻鞆しりさやの寅とらの年

尼ヶ崎住雅伸

【**句意**】新春を今朝迎えました。春が「立ち」ではなく、「太刀」を包む

「尻鞆」の材料は虎の毛皮であり、今年はその虎の年を迎えました。

【**解釈**】◇**春や今朝たち** 新春をけさ迎えた、の意。同じ言い回しの句例

に「春や今朝たつた独子太良月」(境海草・三二・治之)がある。なお、

「たち」(立ち)は「太刀」を掛ける。◇**尻鞆** 太刀の鞆を被う毛皮の

袋。虎などの皮で作る。歌例に「武士のさげはく太刀の尻鞆の虎の尾ふみ

ておそろしの世や」(夫木抄・一二九二六・公朝)、句例に「ほのぼのと

あかしり鞆の太刀拔て」(犬筑波集・三一〇)がある。

【**作者**】尼ヶ崎住雅伸(撰津・尼ヶ崎) 二六句。

141 年としも日ひも恵方えもそへて巳午みづま哉

沢口知徳

【**句意**】今年としは午うまの年で、元日も午うまの日です。それに加えて、恵方えも巳午みづま

の方角ほうかくの年を迎えました。

【**解釈**】◇**午のとし** 寛文六年(一六六六年、丙午)のことか。この年

は、元日も午日であった。◇**年も日も** 年だけでなく日も、の意。句例に

「年も日もけ今日こそむまし国の春」(続山井・一二五四・風鈴軒)、「年

も日もあつばれ御馬ぞろへ哉」(同・一二五六・正算)がある。◇**恵方**

その一年、運勢が良いとされる方角。句例に「みんなみは梅の暦の恵方

哉」(崑山集・八二七・正成)、「恵方より立や申西の花の春」(明暦元年

一六五五)歳旦発句集・六七〇・安静)がある。◇**巳午** 「三午」

(年、日、恵方いずれも午の字があること)を掛ける。歌例、句例ともに見出せない。

〔作者〕沢口知徳(撰津・大坂) 一句。

午の年元日午日なりければ

142 年よ日よ今日馬衣の二足づれ

会津住

〔句意〕今年の元日は午の年で午の日です。馬衣で着飾った馬が二頭連れだつてやつて来たような、すばらしい午年がやつて来ました。

〔解釈〕◇年よ日よ この年も日よ、の意。寛文六年(一六六六年、丙午)元日を指すと思われる。この言い回しは歌例・句例ともに見当たらない。◇馬衣 馬絹とも。正月・祭礼などに馬の背にかける幅広の布。句例に「くる年の馬衣ぬなれや朝霞」(毛吹草・四〇二・定時)、「花やかな馬絹ぬがせなではだけ」(誹諧独吟集・一一〇七)がある。ここでは「午来ぬ」を掛ける。◇二足 「足」は動物や昆虫などを数える助数詞。「馬衣」の縁語。句例に「ながき日に小猫と小ねこ二足哉」(崑山集・七七二〇・林鹿)、「午土は二足があひにだうと落ち」(談林十百韻・五〇五・在色)がある。

〔作者〕会津住(陸奥・会津) 三句。名は記されていない。

午の年の立春三日なりける元日に

寛文六年正月上旬

143 立春に二日路はやし午の年

西山梅翁

〔句意〕一月三日の立春よりも二日早く正月がやつてきました。さすがに馬だけあって速足の午年を迎えました。

〔解釈〕◇寛文六年 一六六六年。丙午。この年の立春は一月三日。◇二日路 二日分の道のり。本句では、立春が正月より二日早かったことを指

す。句例に「正月もまだ二日路ぞ老の坂」(支考・一一三二)がある。また「日路」を用いた句の例に「かいこけて独ぬる夜の長あくび／今いく日路(ふち)でふるさとの月」(時勢粧・二九二二／二九二三・富長)がある。◇立春 午(馬)と立春を詠んだ句に「午の年立春遅かりければ」という詞書の「はや午の年に追付春もなし」(毛吹草・四一八・作者不知)がある。

〔作者〕西山梅翁(撰津・大坂) 138参照。三四句。

午のとし

寛文六年正月上旬

144 立つ年やもろこし迄も通り馬

大阪住氏昌

〔句意〕新年になりました。はるか遠い唐土まで馬を替えないで行くことができるような、すばらしい午の年を迎えました。

〔解釈〕◇寛文六年 一六六六年。丙午。◇立つ年 新しい年が始まること。句例に「立つ年は酉亥のなかよ神の春」(寛文十年(一三七四)歳旦発句集・一三七四・隆榮)、「立つ年や山に木のある祇園会」(玉海集・一四七〇・梅盛)がある。◇もろこしまでも 日本だけでなく唐土にまで達している、の意。歌例に「遙かなるもろこしまでも行く物は秋の寝覚めの心なりけり」(千載集・三〇二・大式三位)がある。句例に「殿ばらやもろこしまでも聞こゆらん」(守武千句・一〇四七)、「能登守もろこしまでも聞こゆなり」(二葉集・七〇七・梅翁)などがある。◇通り馬 宿駅で乗り替えない馬。句例に「御朱印で通り馬なり四方の春」(江戸通り町・一一・道友)がある。

〔作者〕大阪住氏昌(撰津・大坂) 一句。

寛文六年正月上旬

145 今朝是へお馬が参る今年哉

西山梅翁

〔句意〕新年を迎えた今朝、ここに流鏑馬の御馬がやってくる、午の年を迎えました。

〔解釈〕◇寛文六年 一六六六年。丙午。◇今朝是へ 「是へ」を用いた句に「行く鹿はあれへ」と声々に」（宗因千句・六七）がある。◇お馬が参る 『虎寛本狂言』「千鳥」に「御馬が参る、御馬が参る」と申して、いろいろの曲乗りを致しませう」とあり、曲乗りの馬がやってくる時の囃し声をいう。また、同じく狂言の「対馬祭」に「この次に流鏑馬といふて、馬に乗て駆けるうちに的を射る事でござるが、（中略）身どもが「御馬が参る〜」と言ふて駆けますぞ」とあり、正月に行われる流鏑馬の馬がやって来る、という意か。

〔作者〕梅翁（撰津・大坂） 138参照。三四句。

146 国民も邪々踏まぬ世や午の春

三井我足

〔句意〕国の民の中に怒ったり悔しがったりする者のいない太平の世に、午年の春が到来しました。

〔解釈〕◇国民 日本あるいは藩の民。『俳諧類船集』の「伊達」の項の説明に「若殿の御入部は国民も目を驚かす物か」とある。また「子」の付合語の一つに「国民」とある。「国民」と詠む歌例に「国民とともにたのしむ糸竹にをさまる春の色をうつして」（後水尾院御集・一八六）がある。◇邪々踏まぬ 「邪々踏む」は、我意を通そうとする、ひどく怒ったり、悔しがったりするさま。「邪々」の句例に「祝子が乗しは邪々な馬にして」（俳諧塵塚・一四三・来安）、「邪々をふんではもらふ藤が枝」（続山井・一六六・我笑）がある。「邪々」は「午」の縁語。◇午の春 午年の新春。句例に「年の緒やから尾に結ぶ午の春」（続山井・一二六二・友己）がある。

〔備考〕続山井・一二六三に同じ作者の同一句が見える。

〔作者〕三井我足（山城・京） 一句。

147 御代の春やのりもたがはぬ午の年

水野賢賢

〔句意〕あなたさまの時代の春がやって来ました。仏法に違うことのない、そして政も間違うことのない午の年であることです。

〔解釈〕◇御代の春や 主君が治める世の春の意。句例は「御代の春や源氏に叶ふ初子の日」（寛文五年（一六六五）歳旦発句集・一〇一五・定清）、「御代の春や今も延喜の文字心」（寛文六年（一六六六）歳旦発句集・一〇八五・憑富）など多数。◇のりもたがはぬ 「のり」は「法」で、仏法に違うところがない、の意。また、馬に「乗る」の意も掛け、乗り違はない、つまり政を間違うことのない、の意も含む。この言い回しを用いた歌例に「いかにして言ひあらはさん法の道とにもかくにもたがふ言の葉」（新千載集・釈教・八五一・顕遍）、句例に「いにしへの法に違はぬ鉢叩」（俳諧独吟集・二三四・立圃）がある。

〔作者〕水野賢賢（尾張・名古屋） 一一句。

148 穴冠ぬぎて乗初や午の年

作者不知

〔句意〕穴冠を取りはらって乗り初めをします。牛ではない午の年の正月を迎えました。

〔解釈〕◇穴冠ぬぎて 詞書に「牽人なれば」とある。「牽」は「牢」の異体字で、穴冠を取ると「牛」の字になる。これを、「穴冠ぬぎて」と表現した句。「穴冠」を用いた句例は見出せないが、部首を用いた句に「年の緒の糸篇に冬は終哉」（崑山集・七五七四・友我）、「生玉法印庭の杉を」という詞書のある「色かへぬ木へんに久し寺の秋」（境海草・五八一・寸計）などがある。なお、一句の中に「冠」と「初」の字があるので、

初冠をしたばかりの若者が乗初めをしたのかも知れない。◇乗初 その年初めて馬や乗り物に乗ること。句例に「麟なる哉乗初の駒君が春」（時勢粧・一五四〇・牧恕円）、「乗初の舟漕（さい）出て比良の嵩（たか）」（同・三七八六・宗甫）がある。

〔作者〕作者未詳。

149 年の午やたつ門松の大夫黒

江戸住友助

〔句意〕午の年に立つ門松は、義経の愛馬大夫黒のように大きくて黒々とした姿を見せています。

〔解釈〕◇年の午 午年の意。この表現を用いた句に「見初める暦や年の午じるし」（年代不知歳旦発句集・二二二・重貞、寛永一九（一六四二）年歳旦発句集・四〇四・同、毛吹草・三八七・同）がある。◇たつ門松

この言い回しを用いた句に「両方に立つ門松や千々の春」崑山集・一六二・直昌）が、「午（馬）」と「門松」を結ぶ句に「来る年の馬つなぎから門の松」（年代不知歳旦発句集・四七・正平）がある。◇大夫黒 『類船集』『薄墨』の項に「判官の大夫黒といひし馬はもとの名を薄墨と申しなり」とあるように、「大夫黒」は源義経の愛馬の名。『平家物語』『嗣信最期』では、屋島合戦で討ち死にした佐藤嗣信を弔う際、源義経が経を読んだ僧に「判官五位尉になられし時、五位になして、大夫黒とよばれし馬」を与えたとある。また、秦の始皇帝が泰山で雨宿りをした松に五大夫の位を授けたという故事から（『桜川注釈』（一）16参照）、五大夫は松の別名。この句では、この故事を基に、「門松」の「松」から「大夫黒」の「大夫」が導き出されている。「大夫黒」を用いた歌例、句例は共に見出せない。

〔作者〕江戸住友助（武蔵・江戸） 一句。

150 来る年や馬よりおりて門の礼

松賀紫塵

〔句意〕これからやって来るのは午年です。私も馬から降りて門口で年賀の挨拶をすることに致しましょう。

〔解釈〕◇来る年 この言い回しを用いた句例に「来る年の馬樽かくむ朝がすみ」（崑山集・二八八・清成）、「来る年の馬つなぎかや門の松」（年代不知歳旦発句集・四七・正平）などがある。「来る」は「繰る」を掛けるか。◇馬よりおりて この表現を用いた句に「村の梅馬より下て酒買ん」（俳諧勸進牒・一一一・コ谷）がある。◇門の礼 門口で年賀の挨拶をすること。句例に「門礼のいざこととはん都草」（年代不知歳旦発句集・二八七・政時）、「門礼や飾松さへ立ちながら」（続山井・一三〇四・蟬吟）がある。

〔作者〕松賀紫塵（陸奥・岩城） 137参照。一八一句。

※（よしだ・けんいち／いわき明星大学大学院人文学研究科日本文学専攻）

※（まつもと・あさこ／日本文学）